

# かたりべ107

豊島区立郷土資料館だより



池袋富士塚全景（1984年撮影）



池袋富士塚の山開き。山頂の子どもたちと見守る宮司さん

## “お富士やろ”の山開き

七月一日は富士山の山開きの日です。日本の登山は宗教的な行為であり、信仰の対象になっていた山の登山を禁じていましたが、夏の一時期だけは解禁しました。そうして本来は、この修行者や参拝者等の霊山登拝の解禁日を「山開き」と呼んでいました。

古くから人々は、特定の山を神の宿る神聖な場所（霊山）として信仰の対象にしてきました。山頂はその神との交感の場であり、行者たちは霊山の山頂をめざしました。富士山も例外ではなく、既に平安時代末期の一一四五年（久安五）には山頂に経巻を埋めたことが知られ、実際に一九三〇年（昭和五）には、山頂の三島ヶ岳で平安鎌倉時代の経巻等が発見されています。

しかし、誰でもが富士山頂に登れたわけではありません。富士山登拝は、財力・体力そして性別による制約もありました。富士講による富士塚の築造は、厳しい富士詣の道中をしなくても身近な富士塚に登拝することで、老若男女の誰もが富士登拝を疑似体験でき、宗教的な達成感を得られるように工夫されたものだったのです。江戸時代以来、昭和の初めまで、二三区内だけで六八基もの富士塚が造られました。

一八世紀の半ば以降江戸市中に急速に広がった富士講では、旧暦の六月朔日を初富士と呼び、各地の富士神社・浅間神社・富士塚が富士参り（そして山開き）の対象となり、多数の参拝者を集めていました。

今年の七月一日、池袋本町の氷川神社境内にある池袋富士塚の山開きがおこなわれました。池袋富士塚は、一九一二年（明治四五）に地元の富士講であった月三池袋十七夜講が造ったものですが、アジア太平洋戦争を境に講の活動が停止し、富士塚も地元の人々が護っていました。山開きも一九九八年に復活し、現在にいたります。お富士さん”と親しまれる富士塚に、たくさんの子供たちが親に手を引かれ登っています。それを見守る氷川神社の宮司さんの笑顔が印象的でした。

（橋口）

# 『携帯用板さし』忘れられた油絵道具

夏の収蔵資料展「藤本東一良展」―フランス近代絵画の光と色を求めて―より、当館所蔵の東一良作品であり、今の日本で廃れてしまった油絵の道具(写真)について紹介したい。

持ち主であった藤本東一良(大正二年(平成一〇年)は二三歳で長崎・アトリエ村のすずめが丘にアトリエを持って以来、亡くなるまで長崎(現・要町)に住した池袋モンパルナスの画家の一人である。一七歳の頃から出身地の大阪で鹿子木孟郎のアカデミー鹿子木や赤松麟作の赤松洋画研究所に学び、寺内萬治郎に師事し、東京美術学校では藤島武二の教室で学んだ。光風会や日展を中心に作品を発表して活躍した洋画家である。



携帯用板さし

氏の逝去後に御遺族から寄贈していただいた複数の資料の中にあつた当該資料は、『携帯用板さし(注1)』と云い、六枚程度の描画用の板を差し挟んでスケッチに持つて行く道具である。油絵は絵具が乾くの長時間がかかるため、屋外で描いてから持ち帰るにあたり、描きたてを重ねることができない。そこで内部構造として五ミリ程度の間隔を開けて各板を差し挟めるようになっていた。

板(支持体)の商品としてはベニヤにキャンバス布を貼ったものなどあつたようだが、当館の資料は全て一枚板で、反りもなく状態が良い。東一良独自である程である。当時、板はキャンバスに比べ「習作・練習用」との位置付けであったが、独特の描き心地と面白さがあると東一良も自身の技法書で言及している。『携帯用板さし』の利用は一九世紀末の印象派の始まりと関係が深い。それ以前は油絵の制作は屋内(アトリエ)で行うものであつたが、印象派の画家たちは戸外に出て、自然光の下、移ろう光と色の美しさを捉えて描くことに新しさと喜

びを見出した。油絵の屋外スケッチをする際に、麻布のキャンバスは光が透けたり、ぶつけて破れる恐れがある。このため、丈夫で持ち運びが容易な板と携帯用板さしが使われた。

このような西洋美術史上の背景は、日本の油絵史とも符合する。江戸末から明治にかけて大和絵や浮世絵と異質な写実性を「欧米の進んだ技術」として移入したことで日本の油絵は始まった。その後、印象派の登場の衝撃で、西洋芸術の「美学」体得と個性探求の道が始まる。藤本東一良の『携帯用板さし』から、そんな歴史の重なりがほの見える。

ところで、パレットや筆と違い、『携帯用板さし』を日本洋画家の美術展で見られる機会は多くない。板絵の作品価値が高まれば道具(携帯用板さし)から取り外され、独立して流通しがちだからである。都内で主だった公立の美術館と博物館、七館に同一資料の収蔵をお問い合わせしたところ、殆どが携帯用板さしの状態での作品収蔵はないとの回答であつた。藤本東一良のごく初期の作品(板絵)ともども『携帯用板さし』の状態が残ってい

たのは、非常に運が良かったと言える。

美術潮流として印象派が下火になり、作品制作上の必需性が落ちてしまったため、現代の日本での携帯用板さしの利用は絶えてしまった。大正一四年頃から東京都内で『携帯用板さし』を製作していた文房堂(神田)に聞き取り調査をしたところ、一九七〇年代くらいまでは製造・店頭販売していたが、その後受注生産となり、最後に作ったのは今から一〇一五年程前との事である。平成二四年現在は製造中止となっている。

意外なことに、アメリカでは戸外で絵を描く心地良さや板の描き心地ゆえに、愛好者が居続けているようである。『携帯用板さし』を自作してスケッチを楽しむ愛好家や、僅かながら販売している画材店のHPを見つけることができた。

ひとつの道具の喪失は、付随する表現や文化の喪失でもある。当館の藤本東一良の携帯用板さしからインスパイアされて、愛好する人が日本でも再び現れるのを楽しみにしたい。

(注1)藤本東一良は『携帯用板さし』と記述している。商品名としては英語も含めまちまちである。

\* 謝辞 調査にご協力頂きました皆さまに篤く御礼申し上げます。(白田)

# セピア色の記憶

## 第28回 池袋駅前は“ホコ天”の元祖だぜえ

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九七〇年八月二日と現在（二〇一二年九月撮影）の池袋駅東口の様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。



上の写真からは、立っている人、座っている人、とどこどこに親子らしき二人が歩いている姿も見られます。何だろこの人だかりは…、あるいは、何となく不自然な人の多さ、という印象は否め

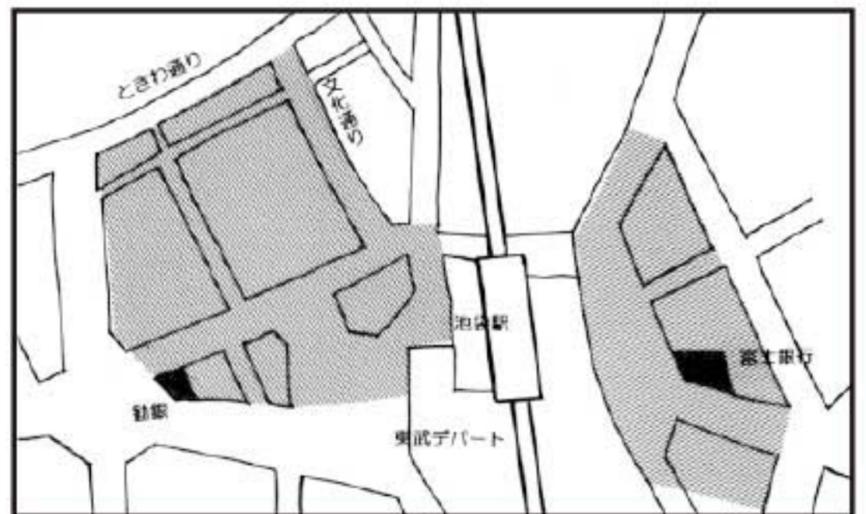
ませんが…。実は、この日は、東京の銀座・新宿・浅草・池袋の四か所初めて「歩行者天国」が実施された日であり、いわば都内の“ホコ天”誕生日にあたるのです。

実施日の少し前、一九七〇年七月二二日の『豊島新聞』の記述から、“ホコ天”開始の経緯と実情に迫ってみましょう。「八月の第一日曜日（二日）から池袋をはじめ銀座、新宿、浅草の四繁華街の目



抜き通りで、朝十時から夕五時まで、車の乗り入れ禁止の「一日歩行者天国」が実施される。（中略）ニューヨーク五番街でそれが実施された直後の警視庁のアイデアだけに、多少拙速の感もあり二番せんじはまぬがれないが、歩行者にとっては、ようやく道路が人間さまのものになった。たとえそれが週に一度だけでもと歓迎一色。池袋も駅東西の半径約三〇〇二十八路線、二九一〇メートル

が“車抜き”になる。（後略）  
同記事には歩行者天国となる範囲の略



1970年8月2日実施 池袋駅周辺歩行者天国範囲図  
（『豊島新聞』掲載の図版を加工のうえ転載）

図も付されていて（右図アミカケ部分）、東口側は現東池袋一丁目から南池袋一丁目にかけて、西口側は現池袋二丁目から西池袋一丁目にかけての部分が車両通行止めになったことがわかります。

一方で、地元の商店会からは、商品搬入時に車が店の近くに着けられないと困る、地方からの客が池袋駅付近の駐車場を利用できないと困るだろう、といった“ホコ天”実施に対する反対意見や心配もあったようです。ただし、これが町の繁栄につながればこんないいことはない…、ということ、何とか実施にこぎつけたようです。

（秋山）

# 鎌倉街道を歩いてみよう② 鎌倉街道を掘る 豊島の遺跡 第十一回

〈前号からつづき〉豊橋から「下宿」

「中宿」を過ぎて「上宿」の方に右折すると、左手に金乗院があります。ここから始まる急峻な坂道が「宿坂」です。近世の書物『若葉の梢』は、鎌倉街道はこの宿坂よりも東側の根生院(近代に転入側を通過していたとしています。しかし宿坂は道の両側に湧水を流す水路があることから、自然の小さな谷筋を巧みに利用しており、当初の位置から動いていないと考えたほうが事実に近いでしょう。

宿坂を登り清戸道(現目白通り)と交差してから、ほぼ直線的に北に延びてきた道筋が北西方向に曲ります(図中A)。雑司が谷鬼子母神堂の西側を抜ける「雑司が谷道」ですが、都電荒川線鬼子母神前の踏切を過ぎた所で鬼子母神参道が分岐

岐します。

さて、東京地下鉄副都心線雑司が谷駅建設に先立つ発掘調査で、建設用地を横切り南北方向に真っ直ぐ延びる中世の道が五〇mほど発見されました(B)。この道は、最大幅五・五mと中世の道としては大きなものです。当初は幅三m弱の路面の両側に側溝が付属していましたが、時が経つとともに側溝は埋まり道幅が広くなるという変遷があるようです。詳しい検討はこれからですが、一三―一五世紀の渥美・常滑・瀬戸の各窯の製品や中国産磁器の破片が出土し、この道が一三―一五世紀に使われたことは確かです。

重要なのは、発見された道が宿坂から延びてきた鎌倉街道に繋がると考えられることです。前に宿坂からの道が図中A

で曲ることに触れましたが、曲らずに真っ直ぐ延びるとすると、発掘された道に繋がることは容易に推定できます。

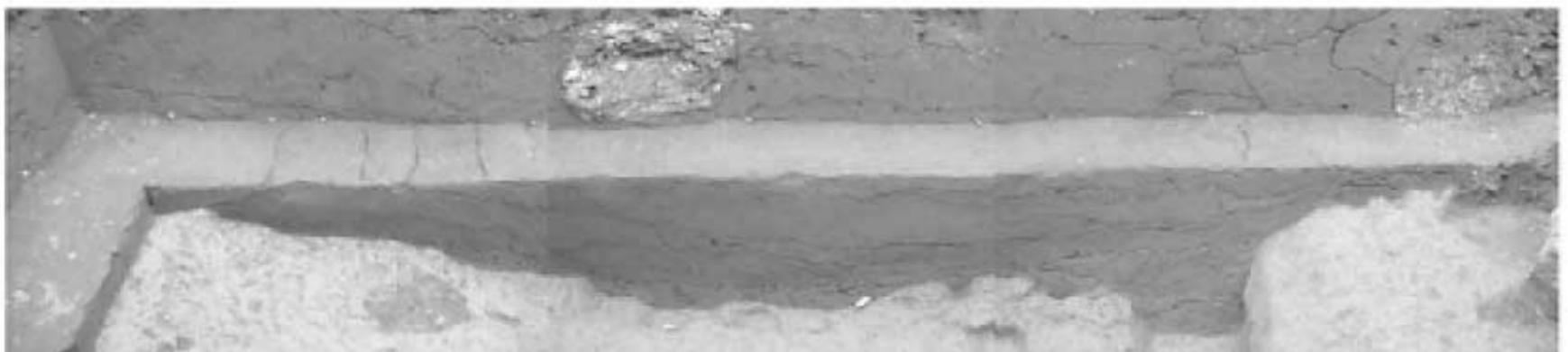
この中世の道が北上し本納寺(近世に転入)の西脇を抜けたところで、弦巻川に下る坂道に沿い幅四m、深さ二mの大規模な薬研堀(断面がV字形)が発掘されています(C)。薬研堀は、鎌倉・南北朝時代に多用されており、鎌倉街道と同時代のものであることは確実です。鎌倉街道はこの薬研堀に沿って北上し、弦巻川を越えたのでしよう。

この先は法明寺の東側を通過すると思われませんが、近代以降の区画整理によって古い地割や道が消えており、地上では辿れません。今後の発掘調査に期待したいものです。一方、高田・雑司が谷地区

の鎌倉街道と高田宿については、臆げながら様子はわかってきたものの、更に調査を進めていく必要があります。(橋口)



鎌倉街道推定ルートと高田宿



左側溝 最初の道幅 右側溝

拡張された道幅

発掘された鎌倉街道の土層堆積状態

## 地元を離れがたい「お不動さま」

—受け継ぎ伝える心・地域によみがえる石像物—

「むかしは、近所の人がお不動さまに集まり、青竹で拵えた旗竿を立て、千代紙を貼りあわせ、墨字で黒々と書きあげた手作りの幟を立て、お菓子などを供えていました」と、昭和一五（一九四〇）年生まれの高木治男さんは話されました。



**西原のお不動さま** 南長崎六丁目35番の千川通り沿いのお不動さまには、「文化十三子四月吉日」と刻まれてある。文化十三年は一八一六年であるから、今から約200年前の造立だ。また、右の石碑には、「明治十一戊寅年四月 再建之 □寄 □原組中みなかみに ざせる ふどおの いわやかな」とある。□は判読不明だが、最初の□は長、次は西と考えられる。長崎村の小字である西原を構成する人たちが建てたものだろう。みなさん、マナーをもって拝見しましょう。

ここで紹介するお不動さまは、ある時

期、地域から姿を消していました。しかし、このたび、再びみなさんの前に姿を現しました。では、お不動さまは、住まいをどのように変え、現在の場所に至ったのか、みていくことにしましょう。

▼いつの頃からわかりませんが、お不動さまは、もともと長崎五丁目、高木さんが、ヤマと呼ぶところにありました。今、そのヤマー帯には高層ビルや住宅が立ち並び、面影はありません。しかし、明治期には、ヤマから家の大黒柱にする木を伐採したと伝えられる場所でした。

▼お不動さまがヤマから移動した先は南長崎六丁目、西武池袋線が千川通りと交差する踏切のそばでした。写真のお不動さまの右側の石碑には、「明治十一年」（一八七八年）の文字が刻まれています。さらに、石碑に「再建」の文字が刻まれていることを考えると、この年に、ヤマから移動したのではないのでしょうか。

では、移動先はどのようなところだったでしょうか。そこには、水が湧き出る八畳くらいの池があり、オタマジャクシがたくさんいて、幼い頃、高木さんはよく遊びました。また、池の近くには千川上水への分水が流れていました。この、かつての遊び場は、今、住宅地です。

▼お不動さまは、さらに移ります。その

時期は、高木さんによれば、昭和二六（一九五一）年頃ではないかということですが、移動先は、南長崎六丁目、高木さんの本家の庭でした。そこに、近所の人たちが五月と九月の二八日に集まり、先に記したように祀り、祈り、楽しいひとときを過ごしました。今も、高木さんの記憶には、そのことが鮮明に残っています。

▼その後、本家の事情で、平成七（一九九五）年、分家の高木治男さんの自宅の庭に移すことになりましたが、このとき、お不動さまを、旦那寺や他のところにあずけようか考えました。しかし、親や近所の人たちが大切にしてきた様子を見てきたので、どうしても手放す気持ちになれなかったということです。そして、庭のお不動さまが門扉越しに見えるようになったことで、当時を知る近所の方々が、懐かしそうに見入る姿も見られました。

▼時がたち平成二四（二〇一二）年八月、自宅の改築の際、お不動さまを、どなたにも見ていただきたいという秘めた思いを公にすることにしました。自宅の一角、千川通りを通る人も見える位置に鎮座させたのです。高木さんの決心が、一人の思いを越え、多くの方々の共感を得るものになることを祈ります。（福岡）

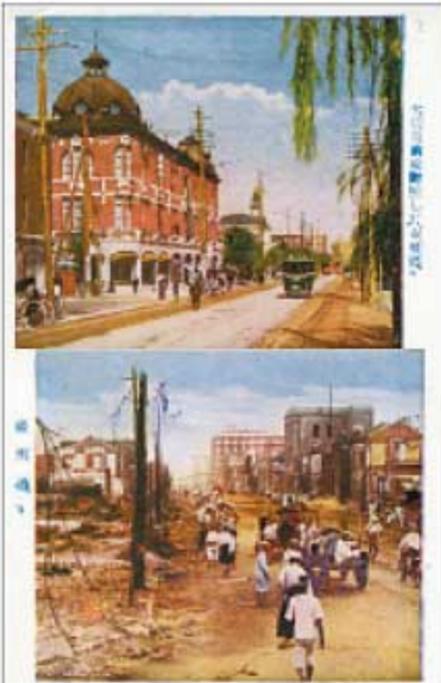
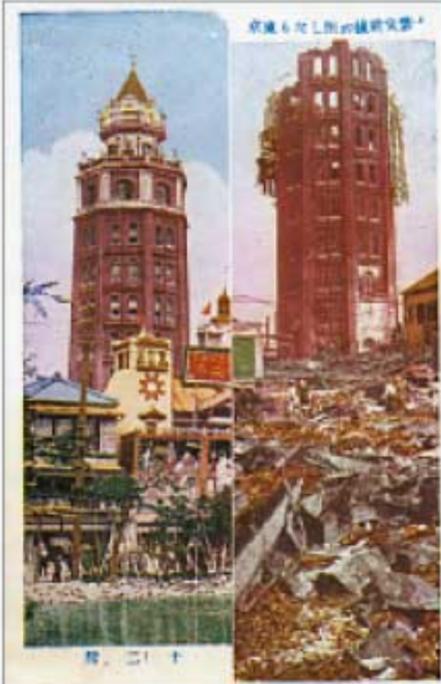
# 新連載 「絵はがきは語る」(3) 関東大震災(その2)

## ■関東大震災と東京

一九二三(大正一二)年九月一日、午前一一時五八分に発生した関東大震災は、昼食時と重なり、各地で火災が発生し、家屋被害は全半壊・焼失を含め三七万二千棟余、死者・行方不明者は一〇万五千余人余にのぼる未曾有の大惨事となりました。東京市は、下町に発生した火災が、折からの強風にあおられて延焼し、火災旋風で多数の犠牲者が出た本所区(現墨田区)の旧陸軍被服廠跡(死者約三万八千人)をはじめ、日本橋、京橋、神田、浅草、深川の各区は、文字通り焦土と化しました。当時「大震火災」「大震大火」と言われた所以です。

## ■震災前後の東京

当館が所蔵する震災絵はがきは、壊滅状態となった東京市街地の惨状を生々しく伝えています。



ます。多くはモノクロ写真ですが、着色印刷の絵はがきを一部紹介します。

①は、有楽町の東京電燈会社全焼の絵はがきですが、モノクロ写真に炎と煙を着色して、大火災の凄まじさを表現しています。②と③は震災前後の写真を一緒に並べた構成となっており、②の観光名所として知られた明治二三年築・煉瓦造の浅草凌雲閣(通称、十二階)が途中から折れて炎上し、無残な姿をさらす光景や、③の廃墟となった銀座通りを避難民の列が延々と続く様子は、八九年を経た現在も私たちに強い衝撃を与えます。

## ■関東大震災と豊島

ところで、震災絵はがきに豊島区域を撮影したものはないのでしょうか。

「豊島区史」によれば、豊島区域の被害状況は、死者二一名、負傷者一〇名、全潰・半潰・全焼一〇一戸とあり、市内に比べて被害は比較的小さく、おそらく絵はがきは作成されなかったものと思われます。しかし、豊島区域を含む北豊島郡は「帝都の北門」として東北・信越・常磐方面へ往還する要路に当たることから、避難者が殺到し、さらに各県からの救援隊や救援物資もここを経由するため、非常な混乱を来したようです。

②

③

豊島区域では、震災の翌日に小学校など一八か所に収容所がおかれ、巣鴨駅・池袋駅付近に救護品受渡所、池袋に郡内配給品集積所が設置されました。区域内の避難者は九月中旬には約七万五千人を数えました。特に巣鴨町は旧中山道の街道筋に当たることから滞留避難者も非常に多く、救助者・避難者の受入れ地としての役割を担っていました。

旧中山道沿いにある眞性寺(巣鴨二)

二)境内に「大震火災遭難者供養塔」(高さ二三〇cm)が建っているのをご存じでしょうか(写真左)。背面の碑文によれば、「未曾有の大震火災に因りて無惨の死を遂げたる人々の菩提を弔はんがため」、征矢彦太郎が発起人となり、大正一三年三月に建立されたもので、賛成者一八一名のほか、世話人二八名と「巣鴨町消防組一同」の名前が刻まれています。関東大震災の記憶を今に伝える貴重な地域資料といえるでしょう。(横山)



眞性寺境内の供養塔

かたりべ  
No.107

2012年10月16日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>